

いたばし
 ビオトープ
 ネットワーク

学校訪問シリーズ⑨

『西台の町と共に生きる』学校 志村第五小学校

「子どもたちに原体験として、ダイヤモンド富士を見せ、縄文の大たき火として野焼き体験をさせ感動と知性をドッキング。人間の本能に近い体験がこの町ならまだできるのです。」

西台は、旧石器時代、縄文、弥生、古墳時代前後期と人類が歴史を刻んだ道の通りに、赤塚・徳丸と並んで、古くから人々が住み暮らしてきた区内でも屈指の埋蔵文化財が出現する地域である。武蔵野台地の北東端にあたり、ここから一気に低地の荒川沖積地へ下っていく。先人たちが、富士が見える見晴らしの良いこのあたりに、居を構えたのも納得がいく。学校の校地そのものも、西台遺跡（縄文・弥生後期・古墳前後期）の中にあり、隣には、有名な五段田遺跡が発掘され、縄文期 8000 年前のものが見られている。ここに立つ学校が志村第五小学校である。温暖化の頭れか例年になく暖かい大寒のある日に、田口倫子校長先生にお話を伺う事ができた。



校庭から見える雄大な空

Q これまで、どんなお考えで学校を進めて来られたのですか。

田口倫子校長先生—「西台の町と共に生きる学校」です。

Q 具体的にはどのような取り組みですか。

田口倫子校長先生—まずは、周りの畑を活用させてもらっての学習です。



学校の森近くの田口校長先生

PTA 会長さんの畑をお借りして栽培活動をしています。子ども農園活動とよんでいます。今は白菜が植わっていて、これまで、なす、きゅうり、トマト、トウモロコシなど収穫しました。全学年が対象で、土曜日の寺子屋主催で募集し、第一、第三土曜日 8:30 ~ 12:00 のうち好きな時間に来て活動しています。ほとんどが親子で参加。毎回 30 人ぐらい来ます。

さけの放流会も 7 ~ 8 年やっています。昨年は平成 18 年 2 月に放流。一人卵を 15 コほど受け取り、家庭で育てていきます。3 ヶ月後に 2 ~ 5 センチほどになった稚魚を荒川の秋が瀬取水堰に放流しました。

Q 総合的な時間での地域班（登校班活用）の取り組みは珍しいと思います。どのようなものでしょうか。

田口倫子校長先生—1 年間、11 時間を当てます。地域班としていくつかの取り組みをします。まず、運動会での地区対抗リレー。このための練習。次が植物を育てる活動。3 時間使い、①何を育てるか、

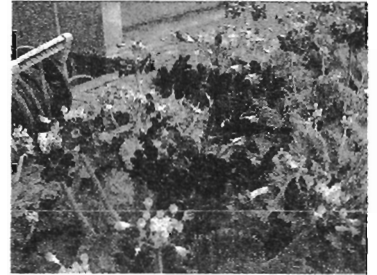
決める。②植える。水やり、表示づくり、雑草抜きなど分担。③地域班発表会一各地域ごとに取り組みの様子など発表しています。その後、志五小祭りです。4時間を当てて、地域班でゲームやお化け屋敷など、自分たちがやりたいお店を出します。町の中で生きる力をねらっています。今年のスローガンは、「一生懸命力を合わせて助け合いオリジナルに元気がよくがんばるドン」など2つです。片づけ方など、特別活動委員会の指導があり、何をどこにどのようにしまおうか細かい指導が行われています。この時間は、土曜日で、学校の自由裁量の時間として取り組んでいます。あと、夏休みに必ず一つ、地域班で、行事を行っています。学校を開放し、花火などもやっています。



卒業生による手彫り樹木名札

Q 子どもたちの取り組みの成果はいかがですか。

田口倫子校長先生一植物の栽培で、水やりなど、6年生が下級生に指導し、成果が上がっています。①関わり合いが深まっている。②成長に関心を持たせる。最後まで、育ったことを確認している。



5年生が桜草を育てて出品

Q 寺子屋活動が以前から、活発ですね。

田口倫子校長先生一オヤジの会も活発に動いています。今、4つの取り組みをしています。



地域班で育てたノースポール

- ①漢字検定のための練習 毎回100名ほど参加
- ②ホームメイドのおかしづくり40人ほど
- ③農園活動 30人ほど
- ④バスケットボール 50～60人ほど

他に地域クラブで 野球・バレー・サッカーがありますが、全て志村第五小の子どもで保護者のOBが世話をしています。



親子で落ち葉掃き

Q 秋に子どもたちが校庭で落ち葉掃きをやってますね。

田口倫子校長先生一各学年で保護者と一緒に、学校の周囲を地域ごとに分け分担して集めています。青健事業の一環です。

Q これから、子どもたちに与えたいものは、何でしょうか。

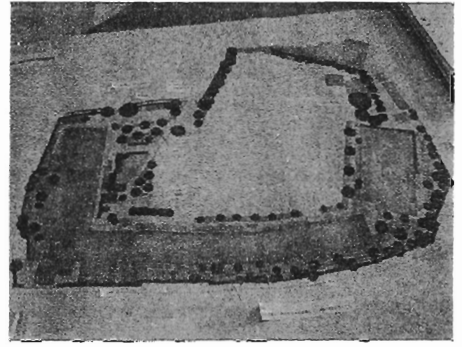
田口倫子校長先生一原初体験です。夕方、ここから、富士山が見える。落日のダイヤモンド富士を見せる。12月の冬至前後から1月にかけて行っています。また、6年生に野焼き体験をさせる。一晩中、火をたいて土器を焼き上げていく。大たき火は、この地域に住んでいた縄文人の心を体験する事です。歴史をさかのぼって、その心を体感しています。今の子どもは、何を出しても、驚きがない。そこに、感動と知性をドッキングさせていく志村第五小の教育です。



力作 6年生の【縄文の】土器
野焼きが校庭でできるのは、地域の
人々の理解と、おやじの会の努力の
たまもの

人間の本能に近い体験が、この町ならまだできる！ 野焼きのとき、けむりが立ち上がってもだれも、文句を言わない町です。五段田遺跡、8000年前から続く歴史を“受け継ぐ”学校です。

—西台と共に生きる、を学校の使命として、地域班の年間の総合的な学習、そして農園活動、野焼きなどに取り組む。多くの地域では消え去っていった人々の営みの伝統がここでは受け継がれている。遠くから縄文人の雄叫びが聞こえてくるような気がしました。—



学校の森計画図(既設)

雑木林お掃除大作戦！ SOE 環境活動レポート —2007.1.13 実施— ～木々にこだまする子供たちの笑い声～

明治の文豪国木田独歩は、著書『武蔵野』の中で“落葉樹林”という表現で雑木林を登場させました。この作品が発表されて以来、武蔵野の風景といえば雑木林を連想することが慣例になっている向きもあるようです。

さて、この「雑木林」とは原生林や原始林と異なり、人の手によって維持・管理されている林のことを指します。

一昔前の日本人の生活には、雑木林はなくてはならない存在でした。例えば伐採した木を薪や炭にして、炊飯や風呂焚きの燃料としてつかいました。また、シイタケ栽培の原木として利用したり、落ち葉は腐葉土にして畑の肥やしにしたり…。

時は流れて私たちの暮らしに「電気」や「ガス」が定着した今、雑木林の役割はどのように変わってきているのでしょうか？



土のじゅうたんを踏みしめて

埼玉県川越の今福というエリアにある雑木林。今回私たち NPO は、この雑木林の維持管理活動をされていらっしゃる過昌司（すぐるしょうじ）さんをお尋ねしました。過さんは 10 年ほど前からボランティアでこの活動を続けていらっしゃる方です。

この日は年に一度行われる「くずはき」という作業を手伝わせてもらいました。「くずはき」とは雑木林の落ち葉を集めて堆肥を作る作業です。もうひとつ、この作業をすることで雑木林の地面に日光を当てて消毒するという意味合いもあるようです。

およそ 3,000 m²に及ぶこの雑木林にはクヌギ、ブナ、コナラ、ヒノキなど、約 30 種類ほどの木々が林立しています。一步この林に足を踏み入れて感じたのは、とにかくどこを歩いても土がフカフカで軟らかいということでした。さながら“土のじゅうたん”とでも表現すればいいのでしょうか。



過昌司さん



—地球の表面とはこんなにもやわらかかったのか—

都会の道を歩きなれている者にとっては、思わずそんな感動を覚えてしまう感触でした。

この日作業に集まった有志は総勢 26 名。熊手やのこぎりなど、思い思いの道具を片手に雑木林の中を歩き回ります。朽ちた樹木を切り倒す役は主にお父さん方。“にわかきこり” になってみたものの、細そうに見える樹木も切り倒すまでの作業はかなりの重労働でした。落ち葉を収集かごの中に詰め込むのは女性陣と子供たち。直径・深さともに 1m ほどのかごには、約 60kg の落ち葉が詰め込まれていきます。かごの上に乗って落ち葉を踏み固める作業は、どちらかといえば遊びの感覚。この落ち葉が山と詰められ、やがて堆肥となるころにはカブトムシも卵を産みに来るそうです。



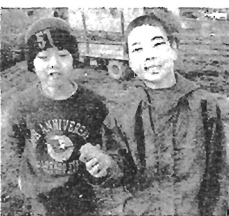
至福の時間

遊びのような作業が一段落したところで、しばしの腹ごしらえ。この日は過さん一家がトン汁と焼き芋を用意してくれていました。オゾンたっぷりの空間で食す土地の産物。木漏れ陽を受けながらの食事は、「至福の時間」という言葉が一番似合うひとときでした。

木々を見上げて深く息を吸い込み、そして土に向かって息を吐き出す。そんな一連の動作だけで、疲弊した神経は浄化される…。雑木林には、人間の生活で吐き出される二酸化炭素を分解したり、火事の延焼をふせいだりという役割はあるものの、現代社会のストレスを和らげてくれる処方箋の役割があるように感じました。



それにもうひとつ、この日参加した子供たちを見ていて感じたのは、雑木林とは「子供本来の声」が自然に出てくる場所なのではないかということ。雑木林の中には終始子供たちの笑い声が響いていました。過さんの地道な活動はそれらを守り伝えていく上で、大変意義のあることだと痛感させられる新春の 1 日でした。



※お土産は採りたての野菜

雑木林の「くずはき」作業を終えてから、ご近所の農家を訪問しました。にんじん畑では野菜くずを取り扱う作業のお手伝い。掘りたてのにんじんを見てどうにも我慢できずにかじりすると、なんとも言えぬ甘さが口の中に広がります。これぞ畑の恵み！ 作業のお礼にいただいたお土産は、青くび大根、ほうれん草、白菜、にんじんなど、超新鮮な採れたて野菜たち。健康的にいい汗をかいて、お土産までもらって…。何か得しちゃったなあ。

発行

特定非営利活動法人 センスオブアース・市民による自然共生パンゲア

東京事務所 東京都板橋区前野町 4-8-6 (〒174-0063) phone: 03-3960-6052 fax: 03-3960-6053
e-mail: info@npo-soe.jp url: www.npo-soe.jp